

AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会 会報 第58号

空中回廊

コレクション展紹介：第1期コレクション展から「愛知県美のいきものたち」

会員のひろば：はじまりから見えること（前編）

～豊田市博物館 村田真宏館長へのインタビューから～
友の会懇親会レポート

収蔵庫から：岸田劉生 《高須光治君之肖像》

理事会から：次に進む友の会



岸田劉生 《高須光治君之肖像》 愛知県美術館

「愛知県美のいきものたち」

2021年夏に田原市博物館で開催した移動美術館では、中野悠学芸員の案で当館所蔵の日本近・現代の美術から「生きもの」を題材にした作品約30点を展示しました。そして翌22年（寅年）の1～3月には、私が当館の一番小さな展示室3で『木村定三コレクション 虎と小さな生きものたち』と題し、小型の工芸品を主とした特集を行いました。どちらも楽しく見応えのある展示だったと自負しているのですが、前者はお客様が田原周辺の方々に限られ、後者は企画展『ミニマル/コンセプトチュアル』と同時開催で、工芸に興味がおありの方は少なかったように思われます。いつかまた「いきもの」をやりたいと願っていたところ、企画展『どうぶつ百景—江戸東京博物館コレクションより』と同時期のコレクション展という機会が巡ってきました。展示室6～8およびその前室とロビーまでの大特集です。

『どうぶつ百景』展は、近世・近代の江戸・東京における人と動物の関わり合いを紹介するという、歴史系博物館らしい趣旨です。対する『愛知県美のいきものたち』について私は、2025年度展覧会スケジュールのリーフレットに「鳥獣や虫魚など、生きものの姿が表された美術には、人間の祈りや観賞・愛玩・自己投影などの心理も映し出されています。紀元前の遺物から現代アートまで、多様な作品をご紹介します。」と書き、美術館らしい趣向を重視しています。

各展示室の仕様と作品との相性により、時代を遡っていくような展示構成になるのですが、展示室8では木村コレクションから江戸時代以前のもを集めます。紀元前の遺物のうち、メソポタミアの赤色メノウ製の蛙（図1）は農耕に必要な雨を招くお守りで、前漢時代のガラス製蟬は埋葬される死者の口に含ませて羽化登仙を祈るもの、ま



（図1）蛙形護符

た漢時代の金銅（青銅に金メッキ）製蚕は富をもたらしてくれる生きものとして、いずれも畏敬や感謝の念を籠めて高価な材料が用いられています。



南北朝時代14世紀の《春日曼荼羅図》（図2）は、春日大社の景観の中に3か所計6頭、奈良公園の鹿の祖先が描かれています（図3）。春日大明神は常陸国の鹿嶋宮から鹿に乗って来たとされます。

（図2）
《春日曼荼羅図》
南北朝時代
14世紀



（図3）鹿の表現位置（左赤色）と部分拡大

佐藤香菜の《透明な境界線Ⅰ》(2016年、図4)は厳島(宮島)の鹿をモデルにしていますが、画中を飛び交う赤色は春日大明神の神火に由来するといひ、鹿たちには生死の境界が見えているようで、時を超えて鹿の霊性がつながっています。



(図4) 佐藤香菜 《透明な境界線Ⅰ》 2016年



(図5) 与謝蕪村《薄に鹿図》
江戸時代 18世紀後半

与謝蕪村《薄に鹿図》(図5)では、背の高いススキに挟まれた山の小径で、一頭の牡鹿が踏み出しかけた左前脚を止めて、視界が開けた前方を見上げています。秋に牡鹿が伴侶を求めて鳴く「妻恋い」の場面とみる説もありますが、蕪村が描いた他の鹿図には、本図と似たポーズで満月を見る雌鹿や、本図を左右反転させた姿の牡鹿が伴侶を連れて楓の葉が降りしきる空を見上げるものがあります。視線

身もこのように幾度も足を止めたことでしょうし、この絵を観る私たちも鹿になって山路を歩いているような気分になります。

展示室7では近代の日本画から、普段なかなか展示できない屏風や掛軸作品を二面のガラスケースの中で。壁には額装作品が並びます。展示室6は近代日本洋画で、熊谷守一の油彩と木内克のテラコッタによる猫の組み合わせもあります。

以上3つの部屋をつなぐ前室には奈良美智や木村充伯など現代の作品を取り合わせ、ロビーでは三沢厚彦による体長約3メートルのライオンの木彫をはじめとする「大きないきものたち」。皆様が初めてご覧になる作品もあるはずです。『どうぶつ百景』とあわせてご堪能ください。なお私一推しの長沢芦雪《薔薇蝶狗子図》は、ふくやま美術館でほぼ同会期の「Rose イメージの系譜」展に貸出のため、またの機会に。

の先は月なのか鮮やかな紅葉なのか、何にせよ自然の光景に見とれるこの鹿には擬人化が感じられます。数え27歳から約10年間、北関東や東北を旅した蕪村自

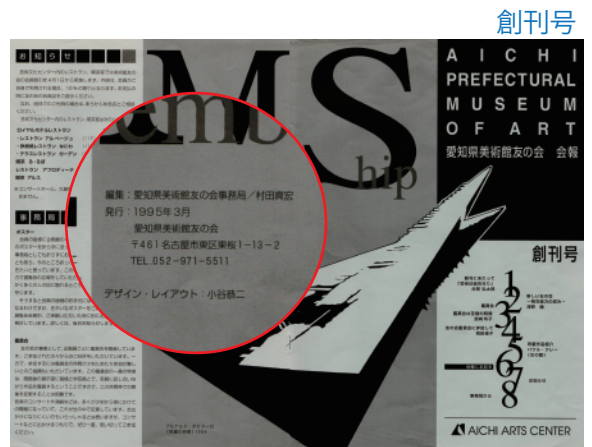
深山孝彰 (副館長兼企画業務課長)

はじまりから見えること (前編)

～豊田市博物館 村田真宏館長 へのインタビューから～

『空中回廊』55号で愛知県文化会館時代の「友の会」を調べているときから「この会がそのまま、新しい美術館に引き継がれなかったのは何故なのだろう?」「愛知県美術館ができてからすぐに友の会が発足しなかったのは何故なのだろう?」と疑問を抱いていました。

そこで『愛知県美術館友の会 会報』創刊号(『空中回廊』というタイトルになったのは第2号から)の最終頁に「編集:愛知県美術館友の会事務局 村田真宏」と掲載されていたのを幸い、現在は豊田市博物館の初代館長に就任されている村田真宏氏にお話をうかがいました。



● はじまり 現在の友の会が発足されるまでの背景を教えてください。

愛知県美術館の前に愛知県文化会館美術館があったのはみなさんご存知かと思います。昭和30(1955)年から文化講堂、図書館とともに愛知県文化会館のなかに入っていました。それから約30年を経た昭和60年ぐらいには、愛知芸術文化センターの建設プロジェクトが既に動きはじめていたのです。築30年の建物を維持するというよりは、時代に合わなくなってきたし新しく大きなものに建て替えよう、という時代でした。私が福島県立美術館から愛知県新文化会館建設事務局にやってきた平成元(1989)年には建築工事が始まっていました。

芸術文化センターができる、新しい美術館になるぞ、と新しい展開をするときは特に、人や組織をどの

ようにするのが問題になります。友の会を含め旧の美術館から色々なものを継承しながらも、次はどういう風に展開していくか、という。もちろん文化会館時代の友の会の人たちからも、新しい美術館ができては是非継続して活動したいという希望は寄せられていましたが、美術館準備室にいた浅野さん(浅野徹愛知県美術館初代館長)をはじめとするスタッフには、友の会も新しい美術館にふさわしい組織にしたい、という思いがありました。

その背景には、我々は新しい芸術文化センターの10階にミュージアムをつくる。これからはコレクションをより充実したものとし、常設展と企画展を主体的にやっていくことを目指していた、ということがあります。文化会館時代の美術館はほとんどがギャラリー。1階の一部屋だけでコレクションを展示していました。ですからその頃の「県美」は「日展などの団体展を開催するところ」というのが県民の皆さんの認識として定着していました。しかし新しい美術館はギャラリーの機能を継承しながらも、本格的なミュージアムとして生まれ変わる。そんな美術館にふさわしい友の会を目指したいということだったのです。



愛知県文化会館美術館 愛知県美術館提供

経緯 友の会設立に動き始めたのは平成4(1992)年10月に愛知県美術館が開館して一年半ほど経ってからですね

開館そのものが大きなことだし、新しい友の会をどういう風に作ったらいいだろうということを十分に考える期間としてまず一年をみました。

まったく新しい、主体的に活動する友の会をつくるための発起人を、浅野さんがご存じだったこの地域の幅広い分野で活躍されている方々にお願いしました。井関弘太郎氏(名古屋大学名誉教授)、馬場駿吉氏、絵本作家の川上越子氏…。この方たちはほぼそのまま最初の理事会メンバーになられて

います。それから規約や会費、特別会員のことなどを発起人会でしっかりと決め、新たなかたちで会員を募集して友の会がスタートしました。解散した文化会館時代の友の会の方々にも募集の案内を差し上げました。



愛知芸術文化センター

愛知芸術文化センター提供

自主自立的な組織を目指して 始めから自主的な運営ができていたのでしょうか

自主的な組織を目指していましたが実働部隊がない状態でしたので、数年は事務的なことも美術館側で全面的にバックアップしていました。友の会事業の実施、総会運営、広報などは私が、名簿管理や経理関係は美術館のアルバイトの方、という感じでした。

そのようななかで、より自主的な組織になっていただき、友の会として事務局を自前でもつのが望ましいという方向性が明確になっていきました。こうして理事会が中心となって友の会の自主的な運営をしていこうという動きが具体化していきました。友の会会長が井関さんから葵美術グループの代表として自主的な活動をされていた宮崎玲子さんに代わったところに、事務局のスペースをつくったり、会報の編集委員を会員にお願いしたり、所蔵品管理という美術館の支援をするグループをつくったりと、徐々に理事自らが友の会の運営を行うことができるようになっていったと記憶しています。友の会は自主自立的な活動をし、美術館はできるだけそれに寄り添い、連携しながら活動する。事務局に人がおかれて理事会が定期的にかかれ、自主的な部会、実働部隊ができて会報の編集、イベントや講座などをやる。10年かからず、比較的早い段階で進んだ感じがします。



第3号 裏表紙の編集後記

友の会創立30周年記念懇親会

2024年10月20日



令和6年度の友の会のテーマは「友の会30年の縁～お世話になった方々に逢う」。その集大成として愛知芸術文化センター10階のウルフギャング・パルクにて記念懇親会を開催しました。これまでお世話になった方々をお招きして思い出話に花を咲かせ、これからの友の会活動について意見を交わしました。

平瀬礼太館長のご挨拶



始めに平瀬館長より一言。この後の懇親会でもあちらこちらのテーブルを巡って気さくにお声をかけてくださり、会員冥利につきました。

来賓の方々のご挨拶

わざわざお越しくださった方々の近況は、昔を懐かしみつつもこれからの活動への活力となるものでした。

長屋菜津子氏

友の会の所蔵品管理サポート部会を長年、ご指導くださいました。退官されても新しいことに挑戦されているそうです。



木本文平氏

碧南市藤井達吉現代美術館館長。友の会で碧南にお邪魔した際は、「他では言えない話」を披露してくださいます。



越後谷卓司氏

現在は多摩美術大学芸術学科専任教員。追っかけがいろいろの、映像のスペシャリストです。



高橋秀治氏

豊田市美術館館長。愛知県美術館の時代も、岐阜県現代陶芸美術館館長の時代も、何かあるとお邪魔していました…。



村田眞宏氏

豊田市博物館館長。友の会が自立できるよう、長年導いてくださいました。



懇親会の様子



会場では常に思い出スライドが上映されていました。



スライド作成は小林克敏会長。会場の隅で、それぞれのスライドについて解説してくださいました。

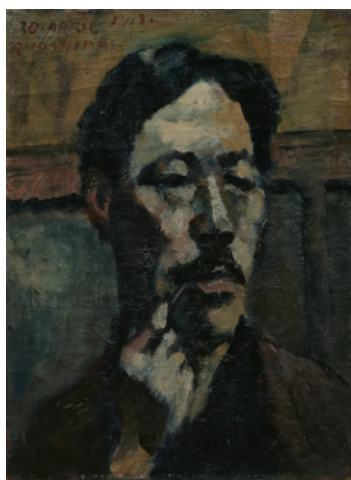


思い出のスライドを見ながら懇親会は続いていく…。

「麗子像」で知られる岸田劉生(1891-1929)は、生涯で多数の肖像画を描きました。特に画業前半期の1913年頃には、身近な知人の顔を盛んに描くその様子が「首狩り」と呼ばれたほどでした。この絵が描かれた1915年にも「首狩り」は続いていました。モデルの高須光治は愛知県渥美郡(現在の豊橋市)生まれの画家で、1915年秋には劉生を中心とする「草土社」の創立に参加しました。初対面でモデルにされた17歳の高須の表情には、憧れの劉生に見つめられる緊張感も窺われます。

留学経験をもたなかった劉生は、『白樺』等の雑誌や舶来の書籍を通じて西洋美術を学習しました。その成果は肖像画制作にも反映されますが、彼は興味深いことに、ポスト印象派のあとにバロック、そしてルネサンスというように歴史を遡りながら西洋美術を摂取していきました。例えば、1913年の《斎藤与里氏像》には、所々に原色が混じる中間色の色調や、絵具の盛りあがりを作る大振りな筆触、やや単純化された形態に、ゴッホやセザンヌ、マティスによる影響の混交が認められます。一方で、その2年後に描かれた本作品は、髪の毛の先まで描き切る緻密な筆致や、アルファベットや紋章を配した黒い背景、比較的滑らかに仕上げられた絵

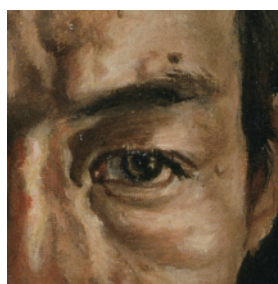
肌が、劉生による北方ルネサンス絵画受容を跡づけています。正面観に近い顔の半分を陰に沈める光は、デューラーの《1500年の自画像》による影響を思わせませす。



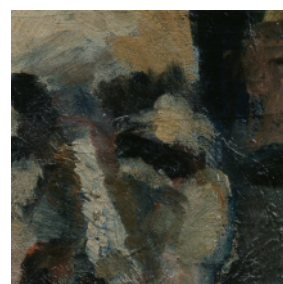
斎藤与里氏像 1913年 油彩 画布 53.0×41.0cm

同年12月22日の《高須光治君之肖像》(豊橋市美術博物館)では、顔を斜めに向けながら鑑賞者を見つめ返す視線の表現において、デューラーの《1493年の自画像》が参照されました。

未来派やキュビズムが紹介され始めていた大正初期の洋画界において、劉生の擬古典的な絵画は、時代遅れだと批判を受けました。けれども彼は、当時の日本で積極的に顧みられなかった北方古典絵画の様式をあえて参照することで、新傾向の美術を矢継ぎ早に取り入れる洋画界に風穴を開けようとしたのでしょう。



高須光治君之肖像 部分



斎藤与里氏像 部分

ただしこの絵には、劉生が好んだデューラーやファン・アイクの絵画にはない要素も認められます。劉生は本作品で、ほくろやしみ、皺といった通常は省略することが多いモデルの細部を克明に表しています。極度の近視であった劉生は、モデルの顔や身体を何度も触ることで、その造形を掴み取ろうとしたのだといえます。彼は、顔面や手の細部を理想化せずに描き出すことで、モデルの実在感を捉えようとしたのでしょう。細部の念入りな表現は同時期の静物画にも共通し、そこでは、りんごの傷や陶器の欠損部分が意味ありげに描かれています。



学芸員の横顔

岩間 美佳 -Iwama Mika-

愛知県美術館学芸員

大阪府出身です。今では、お好み焼きに「コーミソース」が欠かせません。



AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

理事会から

MEMBERSHIP

この会報を手にとられる頃には現友の会の2026年3月末終了を会員の方々にはご報告済みであり、みなさまには先々の不透明さについてご心配をおかけしていることと存じます。愛知県美術館は2026年4月から独立行政法人に移行し、美術館だけでなく友の会を取り巻く環境も大きく変化します。理事会は美術館と情報交換をしてはいるものの、美術館と愛知県の諸々の調整自体が現在進行中であることからみなさまに具体的な事をご報告するまでには至っていません。

愛知県美術館は、平成4(1992)年10月に愛知県文化会館美術館からミュージアムとして、新しく展開していきました。現友の会はその、新しい美術館にふさわしい組織にしたいという美術館側の考えにより生まれ、その支えによって活動を続けることができてきました。そして再び、新しい愛知県美術館と共に新しい友の会の形に変わるための区切りとして、現友の会を終了いたします。

みなさまのご支援があればこそ、自主自立的とはいえ拙いことも多かった友の会運営を継続することができました。2026年3月まで、出来る限りのご説明をさせていただきつもりです。残りの期間もどうぞよろしくお願いいたします。

(愛知県美術館友の会 会長 小林克敏)

編集後記

梅も水仙も、季節に合わせて咲いていました。生活に追われていて見えていませんでした。何かに気づき、それが心を動かし潤いを生む。美術をたのしむということは、そんな潤いを意図的に生むということなのでしょうか？

- 編集 松下智子
喜田泉/小林克敏/田中寛/逸見仁
- 協力 愛知県美術館
- 発行 2025年3月

国際芸術祭あいち2025

- ◆テーマ
A Time Between Ashes and Roses
灰と薔薇のあいまに
- ◆会期
9月13日(土)から11月30日(日)
- ◆主な会場
愛知芸術文化センター
愛知県陶磁美術館
瀬戸市のまちなか
- ◆芸術監督
Hoor Al Qasimi
(フール・アル・カシミ)

定例活動

2024年10月～2025年3月

所蔵品管理 (読み下し)	モニター	発送	受付[累計]	広報	ホームページ	理事会
0回 (0回)	2回	2回	7回	10回	随時更新	6回

友の会活動紹介

2024年11月～2025年3月

2024年

- 11月 ・友の会講座
「抽象表現主義の台頭とその舞台裏」
(愛知県美術館学芸員 恒川明美氏) → 動画配信
- 12月 ・定例活動のみ

2025年

- 1月 ・特別鑑賞会「パウル・クレー展」
→ 動画配信(会期中)
- 2月 ・美術館さんぽ(豊田市博物館)
村田館長から豊田市博物館の活動について お話を聞きました。
- 3月 ・友の会講座
「愛知県美術館の学芸員として」
(愛知県美術館美術課長 古田浩俊氏)



豊田市博物館の村田館長と小林会長

友の会事務局から

◇電話対応について

事務局の勤務が不定期となるため、電話での対応ができないことがあります。お問い合わせ、連絡などは、郵便かFAX、Eメールにてお願いいたします。

◇イベントへの申し込み

Webページからの申し込みも可能になっています。新しい情報は随時更新しますので、ご確認ください。

これからの展覧会のご案内

どうぶつ百景

江戸東京博物館 コレクションより

4/11～6/8

愛知県美術館友の会

〒461-8525 名古屋市中区東桜一丁目13-2
愛知県美術館内(愛知芸術文化センター11階)

✉ info@apmoa-tomo.com

ホームページへのアクセスはこちらから

愛知県美術館友の会

検索

apmoa-tomo.com

tel. 052-971-5511 (代)

fax. 052-971-5617

(火・木 11:00~15:00)

✕ @apmoafriends

